

YMCA

大阪青年



月刊 The YMCA 付録

編集・発行 / 日本 YMCA 同盟 東京都新宿区本塩町7番地

大阪青年 発行: 末岡祥弘 編集: 大阪 YMCA 広報室

〒550-0001 大阪市西区土佐堀 1-5-6

TEL06-6441-0894 FAX06-6445-0297

URL: http://www.osakaymca.or.jp/

(年10回発行) 1947年10月27日 第3種郵便物認可

2009年度 年間聖句

「受けるよりは与える方が幸いである」
(新共同訳: 使徒言行録 20章 35節)

大阪YMCAの使命

大阪YMCAは、聖書に示されたイエス・キリストの愛と奉仕の生き方に学び、YMCAの世界的な運動に連なり、希望を持って、共に生きる社会の実現をめざします。

- ボランティア精神をはぐくみ、互いに協力し、明るくあたたかい地域社会の形成に努めます。
- すべての世代の人びとが、出会いと生きがいを見いだすための、生涯にわたる気づきと学びの活動を展開します。
- 未来を築く力強い子どもたちを、家庭、地域社会と共に育てます。
- 生命を尊重する心を養い、自然と人間が調和する働きをすすめます。
- 世界の人びとと力を合わせ、環境、人権、貧困の課題に取り組み平和で公正な世界をめざします。



海外リーダー派遣 現地リーダーたちと共に

国際交流・協力の今

一人レベルの草の根運動として

プール学院理事長

岩坂 正雄

21世紀に生きる私たちは、「国家」の枠を越えて地球市民の意識と発想を大切にしたい。特に、個人のボランティアリズムに支えられて組織されたYMCAにおいて、「国際」という用語を地球市民としての個人の関係性を示すことばとして理解し、用いるよう心がけたい。

この稿のテーマを与えられて想起されるのは、草の根運動としての国際交流・協力の尽きた畏友 草地賢一氏の生き様とその働きである。間もなくその召天10周年を迎えるが、彼の

生涯はボランティア精神に生きるYMCA人の一つのモデルであったと言える。

関西学院大学神学部の学生時代に、「筑豊の子どもたちを守る会」に身を投じ、YMCAに奉職してからは、神戸、姫路、横浜などの地域社会で働き、さらにはタイ・チェンマイでも協力・奉仕、それらは利害、報酬を超えたボランティア精神の発露としての働きであった。

これらYMCAの働きを通して鍛えられた彼のボランティアリズムは、ネパールの父と呼ばれた岩村昇博士の招きに応えて、「アジアの草の根交流を通して平和と健康を担う人づくり運動」を進めるPHD協会への献身においていつそう花開く。そして、1995年1月17日の阪神淡路大震災の大惨禍は、彼のボランティアリズムとその実践経験の全てが燃え上がるフィールドそのものであった。YMCAやPHD協会で蓄えられたネットワークを生かして地元NGO連絡会議を立ち上げ、在日外国人など弱い立場にある人々とともに頑張る救援活動は内外の注目するところであった。

その後、姫路工業大学の「環境人間学部」の新設に共鳴して教授に迎えられ、それまでの彼を支えてきたボランティアリズム

の実践を科学し、学問として体系づけるボランティア学の構築に取り組み。1999年2月に設立された国際ボランティア学会(隅谷三喜男会長)は、彼のボランティアリズムの集大成の成果とも言えるだろう。

草地氏の夢は、国家主義と戦争の時代を超越して21世紀は、地球市民の意識に立ったNGOやNPOが主役となるような社会の実現であった。国連は、21世紀の幕開けとなる2001年を「国際ボランティア年」としたが、その前年の2000年1月2日に彼はその夢を抱いたまま天に召された。

今私たちも、草地氏のこの夢を、私たちの夢としたい。国家や団体は力を貸すが、働きの根源は個人のボランティアリズムの力による。YMCAはそのことに価値を置くボランティアアソシエーションである。軍政下のミャンマーで、山地和歌子さん(なかのしまワイズ)が縫製授産事業に、恵美奈奈光さん(サウスワイズ)が日本語教育に奉仕している働きは、YMCAの草の根国際協力の身近な例として、私たちYMCA人の誇りであり、組織体としてのYMCAは、そのような私的ボランティアリズムを支えるべき一例ではないだろうか。

(元大阪YMCA副総主事)

地の塩

▼目下、世界が同時不況で苦しんでいる。この不況の発端はアメリカの金融バブル、そして消費バブルの崩壊に原因がある。

日本は10年以上前にバブルを経験した。日本は今回は無関係のはずであったが、経済の落ち込みは、震源地のアメリカ、欧州より厳しい▼その理由は、やはり日本経済が長年の輸出依存体質から、内需主導型の経済体質に転換できなかったことにある。もう一度、アメリカの消費が回復して、日本や中国から再度多くの商品を購入してくれるという輸出中心の景気回復はどうやら難しい。それなら、遅まきながらもつと国内市場を刺激して、消費を活発にしてみたら、という議論になる。しかし、残念ながら、人口減、特に若年層の減少を考えると、日本のパイはこれ以上大きくならない。需要が減少する以上、日本の製造業は明らかに供給過剰である▼しかし、製造業の外に目を向けると、供給力不足の分野がある。医療、介護、環境関連、農林業などの分野である▼日本のYMCAも多様化が進み、昔には考えられなかった分野に進出した。介護がその一つであり、教育事業の内容も昔に比べ、かなりの変革を経験した。中高齢者事業も新しいテーマである。環境が激変するなかで、変わることに難しさを自覚して、変えるべき分野を絶えず意識して、これからの変化に対応してゆくことを心がけたい。(寛)